

# 京鹿子



昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可  
平成二十二年六月一日発行  
通巻一〇三〇号(前月一冊二日発行)

6月号

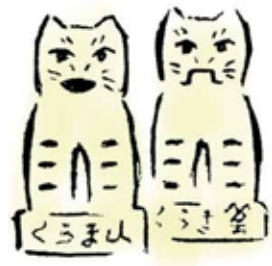
母の日  
丸山佳子

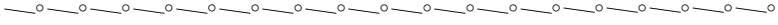
松の芯に胸襟ひらく気にはまだ

聖五月枕高くも低くすぎず

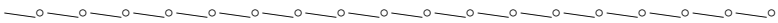
鳥は雲に名のみ残りし女坂

亀が首伸しきつてる昭和の日





感情をしづめて一会座禅草に  
無にまさる桐の花こそ仰ぐとき  
爪まるく切り母の日に合掌す  
晩年の五感ゆるりと髪洗う  
ペンを持つあなたこわいと亀が鳴く  
わたしのみ知る人世や衣更



豊 田 都 峰  
漣 響 集 その十

花 さ そ ふ 風 と つ れ だ ち 野 道 と る  
ま た 藪 へ 入 り ゆ く し る べ も な く 三 寒  
れ ん げ う を 咲 か せ て 嗟 峨 の 藪 ほ と り  
紫 木 蓮 小 督 を 恋 へ ば 高 が か り  
ふ た も と の 白 梅 の ま ま ほ と け 径  
裏 側 で ま た 亀 の 鳴 く 世 す ぎ ご と





## 秀華採集

野立傘あかりの菜種御供かな

奥田筆子

「野立」とした点、かならずしも野点だけではない。いろいろの日除のものと考えてよいが、それらの色彩と季語の組合せもよく、全体にたいへん省略を効かせた表現は正しく俳句である。

鳥雲に峡は出てゆく道ばかり

亀井福恵

まつさをの空探しゐる水仙忌

鈴木順子

前句の下五の断定が季語とたいへん響き合っている。はるかなものへの応え方である。後句の「水仙」に象徴される方への応え方がたいへんよい。

鈴鹿 仁

行く春

山の訓胸よみにをさめて鳥帰る

行く春やたゆたふ一語きめもして

みどり風尊しとする朱の鳥居

愛媛県野風呂句碑探訪

瀬戸内の句碑の導くさくらどき

さくら散る遊女の鳴咽風に消ゆ

---

近 詠

---

和田 照海

遠津波

遠津波桶の海鼠の発光す

鯨東風そろそろ津波届く刻

寄居虫の転び落ちたる遠津波

青麦の海へうねりて遠津波

雛町の雁木一段ほど津波



神麓集

献物帳

林

日圓

風薫る太子の遺墨法華義疏  
 聖武帝墨蹟とはに風薫る  
 東大寺献物帳や柿若葉  
 蝉しぐれ光明皇后楽毅論  
 正倉院宝物なべて風薫る

松田都青

今日もまた一人ぼつちの寒卵  
 一列は悲しい形鳥帰る  
 噓して黙禱少し壊されし  
 夜泣き蕎麦啜りしぶとく生きてゐる  
 誰にでも愛されたくはない枯野

日航株

北村

香朗

春寒や世界の羽に影失せる  
 上場株儂き引け値春の雨  
 天馳けしJALの終値の冴返る  
 日航株芥と消ゆる寒の戻り  
 料峭やJALの株式一円に

服部

郁史

酒器まろししばし遅日を置いている  
 草餅を持ちやわらかき陽の畦を  
 花の夜のボタンの穴の疲れをり  
 裸婦の絵の余白の中の花疲れ  
 花を詩に指しなやかに人を待つ

春の雷

藤岡

紫水

法隆寺出れば俗塵夕霞  
 火の瀧となり水取のお松明  
 香久山をへだて畝傍の霞みをり  
 花馬酔木鯛るれば昨夜の雨こぼす  
 天声は人語にまさる春の雷

鳥雲に

船越

美喜

出会ひとは別離のはじめ鳥雲に  
 裏町のこぼれ灯を享く春の川  
 「海征かば」は亡兄の挽歌や春の星  
 花の雲それぞれ山近くせり  
 夜桜の闇に潜める魔女妖精



神麓集

冴え返る

丹生をだまき

冴え返る伏せ字伏せ字の「蟹工船」  
冴え返る小林多喜二のデスマスク  
「アカ」といふ言葉怖れし冬の時代  
目刺どれも少し反り身に乾きをり  
生ま干しの目刺に生姜醤油かな

外れ螢

竹貫

示虹

愛別の水ぎりぎりへ外れ螢  
外れ螢向うの水は甘いのか  
くわくこうの聲流しを森ホテル  
どくだみの花ぞくぞくと庭の荒れ  
あぢさゐに生きてみしゆゑ又逢へる

山田をがたま

骨粗鬆症今さらながら春陽浴ぶ  
春眠や夢の中では杖持たず  
春雨に濡れてみたくて窓より手を  
菜種梅雨鬱々として口数減り  
思ひきや今年もベランダより花見

いつときも瞬

北川

孝子

しじみ飯おのれ語りの咄咄と  
一生もいつときも瞬湖おぼろ  
啓蟄やどこかで醤油焦げてみし  
湖みつむ静と動の血春隣  
啓蟄のほろほろと訪ふ生家かな

坂本敏子様追悼

高木

智

元旦の別れは遠し西東  
百才を越す母の雛美しき  
この雛を曾孫に渡す日も近し  
花冷の三日続き満開に  
一節の川どこ迄も続く花

花桃

柴田

朱美

桃の花灯せば風がまるくなる  
母方の流れを汲めり桃の花  
烈風に詩の種こぼす桃の花  
遠出して足重くなる桃の花  
花桃は風の重みをまとひつつ



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

野立傘あかりの菜種御供かな

頼らざるがわたしの一善椿東風

白梅や姉には弱い手力男命

口中のレモンドロツプ初音かな

鳥雲に峡は出てゆく道ばかり

禁断のごとき炬燵でありにけり

ひとり居の遠流のごとし春の雪

白梅や片雲ひとつなきみ空

水滴の小さな欠伸暮れ遅し

おとし蓋踊らす火あり春の雨

京都 奥田 筆子

福山 亀井 福恵

大津 鈴木 順子

まつさをの空探しゐる水仙忌

人ごゑも流れゆくなり流し雛

雪国に赴任す友はカウボーイ

卒業や子の足音は近づけり

凍返る実験プランは二度三度

春なかば白衣集ひてデイスカツション

棚田をすべり流るる朝霞

寒見舞小箱にやさし香の木

らふ梅は行き来も楽し門の中

赤城山春雪まとい裾野引く

江戸 伊吹 之博

澁川 東 秋茄子